

Title	教師の意志決定とリーダーシップに関する研究
Author(s)	吉崎, 静夫
Citation	大阪大学, 1986, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/834
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【1】

氏名・（本籍）	よし 吉	ざき 崎	しず 静	お 夫
学位の種類	学	術	博	士
学位記番号	第	7150	号	
学位授与の日付	昭和61年3月18日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	教師の意志決定とリーダーシップに関する研究			
論文審査委員	(主査)			
	教授	水越 敏行		
	(副査)			
	教授	三隅二不二	教授	麻生 誠 助教授 菅井 勝雄

論文内容の要旨

本論文は、「授業（教授・学習過程）」と「学級経営」における教師の意思決定とリーダーシップの問題を理論的・実証的に検討している。なお、本論文は、3部・9章（ただし、終章を含む）で構成されている。

第I部は3つの章からなり、理論編を受け持っている。つまり、第I部は、本論文の研究主題である「教師の意思決定とリーダーシップ」が「授業」と「学級経営」という教育活動領域の中でどのような意義と機能をもち、さらに相互にどのような関連性があるのかを理論的に検討している。いわば、第II部（実証編I）と第III部（実証編II）への道案内としての役割を担っている。

第1章（教師の意思決定とリーダーシップ研究の意義）では、最初に「学校教育における教師の役割」が論及され、次に「教師の意思決定とリーダーシップの定義と特徴」が論じられている。

第2章（教師の意思決定とリーダーシップ研究の概観）では、第1節において、「教師の意思決定研究の概観」が行われている。ここでは、教師の意思決定研究を、授業設計過程と授業実施過程とに分けて概観している。第2節では、教師のリーダーシップ研究を、わが国の研究と諸外国の研究とに分けて概観している。

第3章（本論文における各章の位置づけおよびその相互関係）では、「教師の意思決定とリーダーシップ行動に関連する研究課題領域（図3-1参照）」に依拠しながら、第II部と第III部における各章の位置づけおよびその相互関係を検討している。

第II部（第4・5章）では、学級経営における教師のリーダーシップの問題がリーダーシップPM論を基礎としながら、様々な角度から検討されている。

第4章（教師のリーダーシップと学級集団）では、3つの節において、学級経営における教師のリーダーシップの問題を学級集団との関係の中で実証的に検討している。つまり、第1節では、学級経営における教師のリーダーシップ行動を測定する尺度を作成し、その測定尺度の妥当性を検討している。そして、第2節では、教師のリーダーシップ行動と学級の集団勢力構造、および学級集団単位における学級連帯性（集団凝集性）、規律遵守度（集団規範）との関係を明らかにしている。さらに、第3節では、教師のリーダーシップ行動が、集団サイズ、担任期間および教師の年令、性別によって、どのように影響されているかを明らかにしている。

第5章（教師のリーダーシップに関する自己評定と児童評定）では、学級集団における教師のリーダーシップ行動についての教師自身による自己評定と児童による評定（児童評定）とを比較し、検討している。その結果、自己評定と児童評定は、リーダーシップP次元に関しては質的に類似したリーダーシップ空間を構成しているが、M次元に関しては、かなり異なったリーダーシップ空間を構成しているのではないかと結論づけられた。

第Ⅲ部（第6～8章）では、学校における最も基本的な教育活動である「授業」を研究対象としている。そして、その授業研究は、「教師の意思決定」と「教師のリーダーシップ（教授行動）」という2つの視点から行われている。

第6章（授業における教師の意思決定）では、授業設計と授業過程の両面における教師の意思決定を実証的に検討している。つまり、第1節では、授業設計における教師の意思決定研究の一貫として、教師の単元構成（つまり、単元レベルの授業設計）に影響を及ぼす授業構成要因を明らかにさせている。そして、第2節では、教師の経験や性別などによって、授業のポイント場面での意思決定にどのような違いがあるかを検討している。

第7章（授業における教師のリーダーシップ）では、授業における教師のリーダーシップ（教授行動）と、児童の学習行動や学習集団雰囲気、さらに学習達成度との関係を検討している。

第8章（授業における教師の意思決定とリーダーシップとの関係）では、「授業過程における教師の意思決定」を測定・評価するための方法・技法（評定尺度とカテゴリー・システム）を開発するとともに、教師の意思決定とリーダーシップ（教授行動）との関係を検討している。つまり、第1節では、小学校5年・社会科の授業と、小学校3年・理科の授業を研究対象としながら、第三者（観察者）の目を通して、「授業過程における教師の意思決定」を究明するとともに、教師の意思決定と授業行動（主として教授行動）との関係を明らかにさせている。そして、第2節では、小学校5年・社会科の授業と中学校2年・数学科の授業を研究対象としながら、授業者（本人）の目を通して、「授業過程における教師の意思決定」を分析するとともに、教師の意思決定と教授行動との関係を明らかにさせている。

終章では、以上の研究結果をふまえ、次の3つの観点から全体的考察を行っている。

(1) 「教師のリーダーシップと意思決定」を測定・分析するための用具および技法の開発

本論文の特徴の1つは、「教師のリーダーシップと意思決定」に関する測定用具や分析技法をいくつか開発し、それらを教室内の教育現象（教師を中核とする教室内行動）の解明に利用していることである。

「教師のリーダーシップ」に関しては、次の2つの測定尺度が開発されている。1つは、「学級経営における教師のリーダーシップ」測定尺度である（第4章・第1節参照）。この尺度は、リーダーシップPM論に依拠しながら、リーダーシップP尺度として10項目、リーダーシップM尺度として10項目、計20項目で構成されている。これらの2つの尺度の妥当性は、学級連帯性、規律遵守、学習意欲、学校不満といった外的基準変数との関係において、確認されている（第4章・第1節および第2節参照）。もう1つは、「授業における教師のリーダーシップ」測定尺度である（第7章・第1節参照）。この尺度は、理科授業における教授行動を測定するために「学習の仕方の指導」尺度として8項目、「自主性と信頼関係を育てるための配慮」尺度として8項目、計16項目で構成されている。また、これら2つの尺度の妥当性は児童の学習行動や学習集団雰囲気との関係で確認されている。

以上の2つの測定尺度の共通点は、教師のリーダーシップ測定を児童による評定で行うことにある。ところで、わが国では、児童・生徒による教師評価（教師行動評定）に関する実証研究が少なく、そのための測定・評価用具もほとんど開発されていない。このような研究状況にあって、これらの測定尺度は新しい教師研究の方向性を示唆するものであるといえよう。

「教師の意思決定」に関しては、次の3つの分析技法が開発されている。1つは、「授業過程における教師の意思決定」を分析するためのVTR中断法である（第6章・第2節参照）。これは、録画された授業のポイント場面でVTRを中断させ、そして教授行動の意思決定を求めるといった方法である。2つ目は、「授業過程における教師の意思決定」測定尺度である（第8章・第1節参照）。この尺度は、「熟慮的で一貫性のある意思決定」尺度として5項目、「柔軟で受容的な意思決定」尺度として5項目、計10項目で構成されている。もう1つは、「授業過程における教師の意思決定」を分析するためのカテゴリー・システムである（第8章・第2節参照）。このカテゴリー・システムは、授業者（本人）が各授業場面で行った意思決定の内容を、対象（第1カテゴリー）と種類（第2カテゴリー）の観点から分析するためのものである。

(2) 学級経営における教師のリーダーシップ

本研究の結果は、リーダーシップPM論（三隅1978）が教師のリーダーシップ現象の解明にとっても有効であることを示唆している。つまり、教師のリーダーシップ4類型の効果性の順位は、民間企業体におけるリーダーシップ研究や官公庁におけるリーダーシップ研究といった従来の諸研究結果と一致するものであった。本研究の結果により、リーダーシップ状況におけるP・M両行動の必要性がさらに確認されたといえる。

また本研究の結果は、個々の児童や学級集団に及ぼす「教師のリーダーシップ」の影響が、いかに大きなものであるかを明確に示している。つまり、教師がPM型リーダーシップをとる時とpm型リーダーシップをとる時では、学級集団への影響は全く異なることがわかる。

(3) 授業における教師の意思決定とリーダーシップ

第8章・第1節の研究結果より、適切で効果的な教授行動の前提には、少なくとも「熟慮的で一貫性のある意思決定」があるといえる。また、第8章・第2節の研究結果は、教師の意思決定と効果的な教授行動との関係が「計画と本時（実態）とのズレの大きさ」などの要因によって仲介されていることを

示唆している。

これらの研究結果は、直接的にせよ間接的にせよ、教師の意思決定と効果的な教授行動との間には、何らかの関係があることを意味している。そして、今後の教師のリーダーシップ研究では、前提条件となる意思決定を同時に研究の射程に入れることが肝要であることを示唆している。また、第8章・第2節の研究結果は、計画変更決定率と即時的決定率の両面から、教師の意思決定の特徴を把握し、さらに教授行動との関係を検討するのが有効であることを示唆している。

論文の審査結果の要旨

「教師のリーダーシップと意思決定」を測定・分析するための用具および技法を開発することが本論文の主題である。研究成果としては

- ① 「学級経営における教師のリーダーシップ」の測定尺度を、リーダーシップPM理論に依拠しつつ開発し、次いで「授業における教師のリーダーシップ」測定尺度を開発し、その妥当性を検証したこと。
- ② 「授業過程における教師の意思決定」を解明するために、VTRを中断して、参観者にその先の対処についての判断を求めるという技法を開発した。そして、授業を参観する教師の教職経験年数、性、その題材を教えた経験の有無などで、意思決定にどんなちがいが出るかを明らかにしたこと。
- ③ 「授業過程における教師の意思決定」測定尺度を開発した。また、授業過程における教師の意思決定を、授業者自身が検討できるカテゴリー・システムをも開発し、それぞれの妥当性も検証したこと。
- ④ 授業過程での児童の学習行動測定尺度と学習集団雰囲気測定尺度とを開発し、先の③で述べた教師のそれと合わせて、授業評価に新しい道具を提供したこと。

以上、本論文は社会心理学と教育工学的な観点と方法論を統合することによって、授業研究、授業評価、教師教育、教師の意思決定及びリーダーシップの研究に、従来みられなかった多くの貢献をなし、学術博士の学位を授与するのに充分であると判定する。